愛されているから、成長できる

イエズス会司祭　柳田敏洋

保護者の皆さまへ

保護者の皆さまは、お子さんにどのような人生を歩んでもらいたいと願っておられるでしょうか。よい教育環境の中で可能性を伸ばし、学力を高め、希望する大学や進路へ進んでほしいとの願いで本学園を選ばれたのではないでしょうか。その願いのさらに奥には、「この子に幸せな人生を歩んでもらいたいから」という親としての深い願いがあるのではないでしょうか。

しかし、子どもたちの学校生活は、いつもうまくいくとは限りません。一生懸命勉強しても成績が伸びないことがあります。むしろ下がってしまい、「自分はダメなのではないか」と自信を失うこともあります。

そんなとき、子どもはいつの間にか「自分の成績」と「自分の価値」を同じもののように感じてしまうことがあります。そして私たち大人も、目に見える成績や結果によって、知らず知らずのうちに子どもを見てしまうことがあります。

けれども、**「子どもの成績」と「子どもの価値」は同じではありません。**

私たちは人間の価値を、「何がどれだけできるか」という能力や、「何をどれだけ持っているか」という学歴、肩書、財産などによって測りがちです。しかし、カトリックにはそれとは異なる人間の見方があります。

人間の本当の価値は、その人が何かを成し遂げたから生まれるのではありません。一人ひとりが、存在そのものにおいてかけがえのない者であり、神から望まれ、限りなく愛されている。そこに人間の尊厳の最も深い根拠がある、と考えるのです。

人生には成功もあれば失敗もあります。喜びもあれば、思いもよらない挫折や苦しみもあります。しかし、どれほど失敗しても、何かを失っても、神から愛されているという人間の価値まで失われることはありません。カトリックが語る「幸せ」の最も深い土台は、ここにあります。

「私は大切な存在なのだ」という土台があれば、失敗しても、「自分には価値がない」と自分を否定する必要はありません。「今回はうまくいかなかった。でも、もう一度やってみよう」と立ち上がることができます。

成長したから愛されるのではなく、すでに愛されているから成長できるのです。

そう考えると、学ぶことの意味も少し違って見えてきます。

幸せになるために勉強するのではありません。すでに自分に与えられている幸せを生かすために勉強するのです。
自分に与えられた可能性を磨き、豊かにし、そしていつか、その幸せをほかの人々と分かち合うために。

それが、カトリック学校が大切にしたい「学ぶ」ということの一つの意味なのではないでしょうか。